
『判断力批判』における「演繹論」の意味——「認識一般」と「客観一般」との関係を手掛かりに
久保志織（京都大学）

本発表の目的は、カントの『判断力批判』における「純粋な美的判断力の演繹」（以下「演繹論」）が、超越論哲学の問題を引き継いでいるものであるということを提示することである。「演繹論」においてカントは、美の分析論で規定された趣味判断の特質である、趣味判断の主観的普遍妥当性の正当化を試みた。同じく趣味判断の主観的普遍妥当性の正当化が問題となっているのが、カントの「人間学に対するレフレクシオン」の988番（以下R988）である。R988は1784年頃に書かれたと推定されているものである。P・ジョルダネッティは、「カントの趣味判断のア・プリオリ性の発見」（Piero Giordanetti, “Kants Entdeckung der Apriorität des Geschmacksurteils: Zur Genese der Kritik der Urteilskraft”, in: Heiner Klemme (Hrsg.), *Aufklärung und Interpretation*, 1999, S. 171-196）という論文において、このR988を参照することによって、趣味判断における「認識一般（Erkenntnis überhaupt）」と「客観一般（Objekt überhaupt）」との関係を手掛かりに、趣味判断の主観的普遍妥当性の正当化の問題を捉えている。こうしてジョルダネッティは、趣味判断の主観的普遍妥当性の問題を、私たちがいかにして認識の対象とはならない対象の概念である客観一般と関わるができるのかという超越論哲学の課題のなかに位置づける。

しかし、ジョルダネッティは、『判断力批判』においては、「客観一般」の概念は消えていると指摘している。つまり、『判断力批判』の「演繹論」において超越論哲学の課題もまた消えてしまったと解釈しているのである。確かに、従来の『判断力批判』に関する多くの解釈でも、「演繹論」は、趣味判断の主観的普遍妥当性の問題として扱われており、それがカントの超越論哲学のなかに位置を占めていることは指摘されていなかった。本発表では、ジョルダネッティが指摘するように「客観一般」の概念は『判断力批判』から消えたと解釈するのではない。むしろ、「認識一般」に対応する「客観一般」の概念は、『判断力批判』での重要概念である「私たちの認識能力に対する自然の合目的性の原理」すなわち「超感性的基体」に引き継がれていることを提示する。このことによって「演繹論」が超越論哲学の問題を含んでいると考えることができるであろう。